

窓辺

わたなべ ひでひこ
渡辺 英彦

ミッション麺ポッシブル

富士宮やきそば学会の人氣が高まり、各地から出張依頼が相次いだため、やきそば学会は焼き手を派遣する「やきそば伝道使節団」を組織した。その英語訳(?)は映画のタイトルにちなんで「ミッション麺ポッシブル」。別に私が主演のトム・クルーズに似ているからという訳ではない。

M I S S I O Nとは、「ミッション系の学校」などの場合、「キリスト教の伝道使節」の意として使われるが、映画「MISSION N・IMPOSSIBLE」の場合には不可能な「任務」の意となる。文法的にはIMは「否定」を表す接頭辞だが、ミッション麺ポッシブルの「麺」は「肯定」を表す。「麺でまちを活性化たらしめる使命」とでも訳したい。

とまあ理屈を並べてみても、実際は単なる「おやじギャグ」。しかし、今日メディアの世界はこの「おやじギャグ」であふれており、

楽しい言葉遊びは広告業界でも欠かすことはできない。なぜなら、おやじギャグが秀逸であればあるほど、情報発信力が高まり、商品が売れるからである。例えば、「通勤快足」「写ルンです」「パウリಂಗガル」等々。

私はこのネーミングによる情報力＝話題創出力はまちづくりにも大いに役立つと考えている。だからこそ、私はやきそば学会の一連の活動に対するネーミングには焼きそばの調査員「やきそばQ麺」以降、こだわりを持ち、妥協しない姿勢を貫いてきた。話題性のあるおやじギャグを産み出すことがミッション(使命)であると考えて思っている。

しかし、「一連のミッションに」
「ミッション」手数料はない。個人的には「ミッション」ではなく、「コミッション・インポッシブル」である。とほま。

(富士宮やきそば学会長)